

第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

母の洋裁人生と私

楠 みや子・東京都世田谷区

過去の記憶というものは、突然脳裏に降ってくることがある。セピア色の写真が鮮やかな色彩を放つ動画に変身して、人物が活き活きと動き出すことさえあるのだ。母を見送ってしばらく経った時、あの記憶もいきなり蘇り、私の中で記憶の鎖を繋いだ。

戦後十年ほどが経過した、寒い小雪混じりの日のことだった。私は母の背中で、すっぽりと「ねんねこ」に覆われていた。

そこは所狭しと洋服生地や裁縫材料、糸糸等が並べられた「いちまつや」という店だった。三歳そこそこの私が店の名前まで覚えているのは、その後母に連れられて何度もその店を訪れるようになったからだ。

「表の張り紙を見て来ました。洋裁の腕には自信があります。私に仕立て物を請け負わせて下さい」

母が深々と頭を下げたせいで、背中の私の身体は勢いよく上下した。風呂敷包みを解いて、自身が仕立てたスーツを見せ、卑屈なまでに自分を売り込む母と店主のやりとりを聞いて、子供心にも「いやや、お母ちゃん、やめて」と感じたから、私はこの記憶を封印していたのかもしれない。

私の両親は揃って紀州の出であるが、訳あってその結婚は周囲から祝福されるものではなかった。母が、家も親弟妹も捨てて、一足先に神戸に出ていた父を追って家出してきた話は、幼い時からまるで自慢話のように聞かされていた。着の身着のままの家出ではあったが、母は親友に頼んで愛用のミシンを送ってもらったのだという。安アパートのドアに『婦人服お安く仕立てます』と張り紙をして、内職に勤んでいることを風の便りに聞いた祖母は、「内職させるために洋裁を習わせたとちがうわ」と嘆いたそうだ。

しかし、戦後の洋装ブームに乗ったことと、丁寧な仕立てと気さくな人柄で母の内職は繁盛したらしい。少しずつ生活が落ち着き、ぼろアパートから脱出し、郊外の小さな平屋に引っ越したことで、顧客を手放さざるを得なかった母の苦肉の策が、前述の「いちまつや」で売り込み作戦だったわけだ。

その後も母の家庭洋裁は口コミでどんどん顧客が増え、夕方には勤め帰りの御嬢さん方が仮縫いのために居間に並ぶようになった。トルソーには流行のスーツやワンピースやコートが着せられ、順番待ちの人達のためにファッション雑誌が積まれていた。中には幼い私にお土産をくれたり、遊んでくれる人もいた。母のことを『デザイナーの先生』と呼ぶ人も

いたくらいだ。

「洋裁している時が、一番楽しいわ。どんどん腕が上がっていくのが分かるのよ」

と、口癖のように言いながら母は、日々の忙しさの中で、辛いことは全部ミシンの針に乗せて向こう側に追いやっていたような気がする。「お店を出せばいいのに」と言われることもあったようだが、あくまで内職の域に留まったのは、私のためだったのかもしれない。

やがて、生活のために内職をする必要のなくなった母は、友人達に乞われるまま、自宅で小さな洋裁教室を開いた。笑い声が絶えなかったその教室は、教える立場であった母が認知症を発症してからも継続され、三十年もの時を刻むのである。週に一度、仕立物を携えて集まり続けてくれた有難い人脈は、母の大切な財産となった。

私はミシンの音と共に育った。産着から始まり、母の病が進み針を持ってなくなるまで、既製品のお世話になったことは殆どない。子供の頃は友達に着ている流行の既製服を欲しがって駄々をこねたこともあったのだが。ピアノの発表会のドレスも中高時代の制服も、ウエディングドレスもお色直しの華やかなドレスもお手製だった。結婚してからも、母が孫達の洋服を縫っては送り続けてくれたおかげで、経済的にもずいぶん助かったものだ。

私の家族に留まらず、母は近い人々のために自作の洋服を送り続けた。私の姑の遺品の中に、何十枚もの母の作品をみつけた時は、改めてその数の多さに驚き、涙が溢れたものだ。我が家のお隣に住み子供達を可愛がってくれた老婦人は、百一歳で亡くなる直前まで母作のブラウスとスカートを身に着けて下さっていた。

老人ホームに入ってからヘルパーさん達に、「好きな生地を持ってらっしゃいな。縫ってあげるわよ」と言い続けた母の両手は、車椅子やベッドの上でも、まるで針仕事をしているかのような仕事をみせた。

モンペ姿で過ごした青春時代、戦後の混乱期の洋裁ブーム、既製服が台頭し、高級ブランドが持て囃された時代・・・昭和の貧困と繁栄を母は洋裁を通じて身近に感じながら、逞しくも柔軟に生き抜いたと思う。

洋裁を術として、娘に愛情を注ぎ、人間関係を紡ぎ、自己を高めていった母のミシンを踏む音が今も聞こえてくるようだ。